

## 水稻の基肥一発施肥体系では、施肥から入水までの期間が長期化すると減収と玄米品質低下のリスクが高まる

### 【概要】

水稻の基肥一発施肥体系では、施肥・耕起してから入水までの畑期間が2週間以内であれば、収量と玄米品質への影響は認められません。しかし、3週間以上の場合、収量と玄米品質が低下するリスクが高まります。

- 1 水稻の基肥一発肥料を施肥・耕起してから入水までの畑期間が長期化すると、施肥したアンモニア態窒素が硝酸態窒素に変化します(図1左)。硝酸態窒素は、降雨等によって地下に流亡するため、移植時のアンモニア態窒素量が減少します(図1右)。
- 2 施肥・耕起してから入水までが2週間以内の場合、収量への影響は認められません。一方、3週間以上になると、減収する傾向にあります(図2)。
- 3 緩効性肥料の窒素溶出は施肥日が起点になります。このため、早くに施肥した場合は、窒素溶出のスタートが早まり、緩効性肥料に含まれる窒素が入水前に流亡して肥効ロスが発生します。また、窒素溶出ピークも前進するため、登熟期の溶出量が減少し、減収や玄米品質低下のリスクが高まります(図3)。

### 【試験データ等】

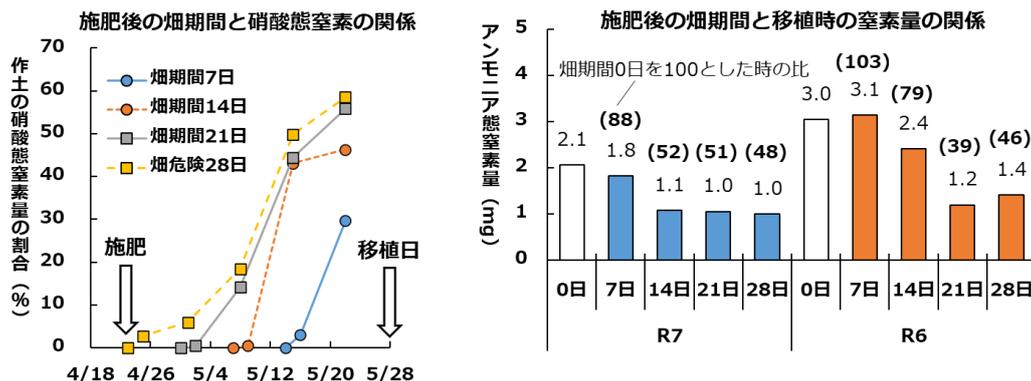


図1 施肥後の畑期間と硝酸態窒素、移植時アンモニア態窒素の関係

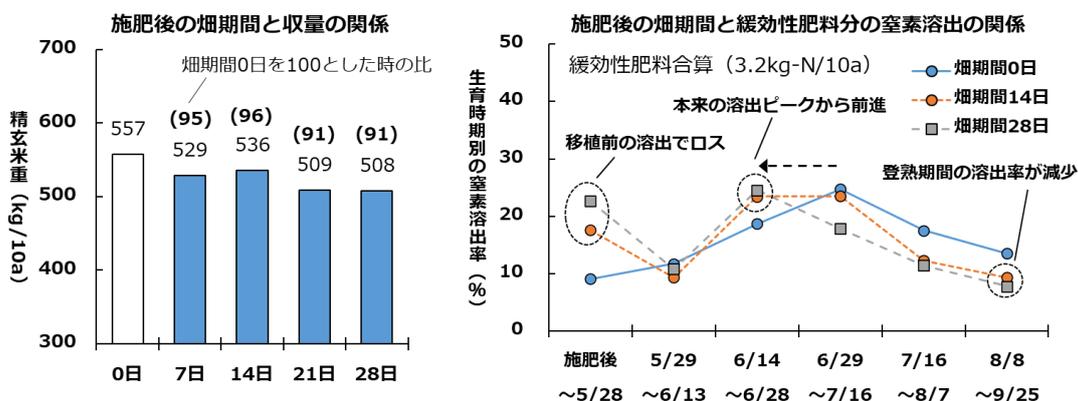


図2 収量との関係

図3 施肥後の畑期間と窒素溶出の関係

【令和7年度成果】基肥一発施肥体系における施肥から入水までの畑期間が水稻の生育・収量、玄米品質に及ぼす影響 (R7-指-06)